

第136回全国大学国語教育学会茨城大会シンポジウム

2019年6月1日

文学教育における「深い学び」

—新学習指導要領下における文学教育の方向性—

都留文科大学 鶴田清司

「文学教育」とは

文学教育は、官制の言語技術主義的な国語教育との闘いの中から生まれ、育ってきました。それは、国語科を単なる言語技術の教育におとしめることなく、生きいきとした人間教育の場とするために、きびしい状況の中で実践されてきたのです。それは、ある立場からは芸術教育として位置づけられ、国語科の枠を破るものでもあったのです。」(西郷竹彦・浜本純逸・足立悦男編『文学教育基本論文集』1988年、明治図書「編集の意図と方針」より)

「主体的・対話的で深い学び」とは

「ごんぎつね」の感想文

「夏ぐらいに、友達の教科書をかりて教科書にらくがきをして、絵を書いてしまって、ゴメンネといっかいあやまつたときはゆるしてもらえたけど、昼休みにはなしかけてもむしされ、三回くらいあやまっても、ゆるしてもらえず、手紙で、二回目だけど、やはりゆるしませんと手紙でかかれ、もういついて母さんにゆって、「おわり」になった。まだ、なかよしでわない。私は、ごんであり、兵十でもあります。ごんの理由は、なんかいもあやまっている所。兵十の理由は、らくがきをしてしまって、人の絵を書いてしまったことです。」(原田大介『インクルーシブな国語科授業づくり』2017年、明治図書)

友達の教科書に落書きをして、なかなか許してもらえなかった舞衣が「私は、ごんであり、兵十でもあります」と述べたことが、いつも暴言や暴力を繰り返す菜摘(家庭で父親から暴力を受けている)にも影響を与え、「せつない。二人ともかわいそう。うちとやよいの関係に似ている」と自分の経験と結びつけて自分の言葉を紡ぎ出していく。

↓

自分の生活経験と結びつけることによって
作品世界を「わがこと」として捉えている。
自己認識・他者認識の深まりがある。
「主体的・対話的で深い学び」の生成



「深い学び」の成立過程

教材との対話
(内的な対話)

他者との対話
(外的な対話)

自己内対話
(新たな認識)

1 本テーマに対する基本的な立場 (発表要旨集)

- ① コンピテンシーベースの教育への転換が図られるなかで、文学教材でこそ育てるべき「資質・能力」とは何かを明らかにしていくことが必要である。
- ② そうした「資質・能力」を育てるために「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められているなかで、表面的なアクティブ・ラーニングに陥らないためには、何よりも教師の教材研究の深さが問われている。
- ③ 「国語科ならではの見方・考え方」と「深い学び」の関係について正面から追究していくべきである。「言葉による見方・考え方」をふまえつつも、それを相対化し、乗り越えていく視点を持つことが必要である。

2 各報告に対するコメント(触発されたこと)

【勝田光氏の報告】

- 読みの「深まり」をどう捉え、どう評価するか
「一つの尺度」ではなく「複数の観点から」
「その子なりの読みの深まりを見出すこと」
評価の方法……「みとり」による個人内評価が基本
もっと言えば、作品との多様な出会いを大切にすること
(先の「こんぎつね」の学びの事例)
- 多様な読者を「深い学び」に誘うための唯一絶対の方法はない。個々の児童・生徒、作品に応じて柔軟に活用する

【佐野正俊氏の報告】

- 「二元論への違和感」には同感
文学教材でも論理的思考力・表現力は育つ
「根拠」となる言葉・文をもとに「理由づけ」をして自分の考えを語り合うこと(根拠・理由・主張の3点セット)
→コミュニケーション力、メタ認知、人間関係スキルなどの「コンピテンシー」にも及ぶ
- 「どのように語られているかを読むこと」と「深い学び」
「レキシントンの幽霊」=「物語ることについての物語」「記憶の死に抗する営み」(中野和典)
(『<教室>の中の村上春樹』2011年、ひつじ書房)
→「こんぎつね」の前書きの意味
(「こん」のことを忘れないように語り伝えてきた話)

【山中吾郎氏の報告】

- 文学教育の社会的有用性
前回のシンポジウムでの三田誠広氏の指摘
文学の授業でも調査研究、報告、プレゼンなどの能力は身につく
- 西郷竹彦氏の「教育的認識論」
教科横断的な「見方・考え方」として有効である
「教科ならではの見方・考え方」と「教科等を超えて有効な『見方・考え方』(比較・分類・関連付けなど)」(奈須正裕『資質・能力』と学びのメカニズム』2017年、東洋館出版社)
- ・鶴田清司『ものの見方・考え方』を働かせることによる『深い学び』～西郷竹彦の『気のいい火山弾』の授業を中心に～』『授業づくりと子ども理解の往還によるアクティブ・ラーニングの課題克服』2018年、都留文科大学

①文学教材でこそ育てるべき「資質・能力」とは

- <教科内容>としての国語科の「知識・技能」
・文学の読み方、味わい方(文学鑑賞・批評)
〈解釈〉の力……前理解(生活経験)に基づく読み
〈分析〉の力……基本的な作品分析法
- ・国語科ならではの「見方・考え方」としての文学的な「見方・考え方」
現実を「異化」して認識する力
- <教育内容>としての「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」
・人間や芸術に対する興味、他者理解能力、論理的思考力と感性的思考力、コミュニケーション能力、メタ認知などのコンピテンシーに加えて、**他者や世界を類推によって「わがこと」として捉える力**など
- ・読書への興味、意欲
- 類推(アナロジー)思考は「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」(中教審答申2016)として特に重要である。

②「深い学び」のための前提としての教材研究

「主体的・対話的で深い学び」の推進が叫ばれている中で、言語活動の種類やアクティブ・ラーニングの形態が議論の中心になりがちで、「深い学び」の前提条件が軽視されている。

つまり、「主体的・対話的で深い学び」のためには、教師の学びの深さ、教材研究の深さが決定的に重要である。

→佐野報告、山中報告

「大造じいさんとガン」(椋鳩十)の事例

言語活動として最後に物語の推薦文を書くという授業。
子どもが書いた推薦文の中に、「残雪と大造じいさんが仲良くなったお話です」という記述が複数見られた。

これは作品を根本的に読み誤っている。大造じいさんは専用の檻(おとりのガンは鶏小屋)に入れるなどして、残雪が人間になつかなないようにしている。傷が癒えた残雪もまた躊躇なく、「ハシッ! 快い羽音いちばん、一直線に」空へ飛び去っていく。両者の関係は、緊張感のある対峙の関係であり、友情とは無縁である。

深い学びのためには、教材の深い理解が決定的に重要である。

2018年度「教授学演習Ⅱ」の授業計画と内容

- 第1回～第3回 オリエンテーション、作品分析法の説明など
 第4回 「ごんぎつね」の全文の読みと各自の学習課題の発表
 第5回 「ごんぎつね」の教材研究①構成～全体構成～
 第6回 「ごんぎつね」の教材研究②表現～反復表現～
 第7回 「ごんぎつね」の教材研究③表現～対比表現～
 第8回 「ごんぎつね」の教材研究④表現～オノマトペ～
 第9回 「ごんぎつね」の教材研究⑤表現～色彩語・比喻～
 第10回 「ごんぎつね」の教材研究⑥視点～話者と視点～
 第11回 「ごんぎつね」の教材研究⑦視点～視点の転換～
 第12回 「ごんぎつね」の教材研究⑧文体～矛盾した表現～
 第13回 「ごんぎつね」の教材研究⑨文体～語りの特徴～
 第14回 「ごんぎつね」の教材研究⑩作品の謎（草稿→定稿）
 第15回 「ごんぎつね」の教材研究⑪「比べ読み」による批評

（『平成30年度教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業』テーマ8「教科教育コアカリキュラムの研究」成果報告書」広島大学）
<https://www.hiroshima-u.ac.jp/ed/news/50553>

③「国語科ならではの見方・考え方」と深い学び

○「言葉による見方・考え方」の問題

「国語科ならではの見方・考え方」と「深い学び」の関係について正面から追究していくべきである。「言葉による見方・考え方」をふまえつつも、それを相対化し、乗り越えていく視点を持つことが必要である。

○文学的な「見方・考え方」としての「異化」

日常的・固定的な見方・考え方を打破し、新しい世界を創造すること

③文学的な「見方・考え方」としての「異化」

○「ありふれた、日常的な言葉の、汚れ・クダビレをいかに洗い流し、仕立てなおして、その言葉を、人間がいま発見したばかりでもあるかのように新しくすること、いかに見なれない、不思議なものとするか、ということだ。」

○「この文章に書かれていることは、知覚において知っている。しかしこれまでそれがこのように書かれているのを見たことがない。このように実感したこともない。それは見なれない、不思議な書き方であって、しかも確かにこれは真実だと実感される……これが「異化」ということを見る、ひとつの指標である。」（大江健三郎『新しい文学のために』1988年、岩波新書）

文学的な「見方・考え方」としての「異化」

国語教育界では、足立悦男氏が先導的な問題提起をしてきたが、その後の実践的な展開は十分とは言えない状況にある。

ライオン 工藤直子
 雲を見ながらライオンが
 女房に言った
 そろそろ めしにしようか
 ライオンと女房は
 連れだつてでかけ
しみじみと縞馬を喰べた
 （『てつがくのライオン』理論社）

※普通の表現では、「むしゃむしゃ」「ががつ」など

【参考文献】

- ①に関して
 ・鶴田清司（2018）「連載 教科の本質をふまえたコンピテンシー・ベースの国語科授業づくり」（全12回）『教育科学国語教育』、明治図書
- ②に関して
 ・鶴田清司（2019）「教師の資質・能力としての教材研究力の育成」『文部科学省委託事業「平成30年度教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」テーマ8「教科教育コアカリキュラムの研究」成果報告書」広島大学
<https://www.hiroshima-u.ac.jp/ed/news/50553>
- ・鶴田清司（2019）「大学の教師教育における作品分析法の指導」『言語技術教育』No.29、日本言語技術教育学会（近刊）
- ③に関して
 ・鶴田清司（2018）「『もの見方・考え方』を働かせることによる『深い学び』～西郷竹彦の『気のいい火山弾』の授業を中心に～」『授業づくりと子ども理解の往還によるアクティブ・ラーニングの課題克服』、都留文科大学
- ・鶴田清司（2018）「国語科の『見方・考え方』が鍛えられる授業とは～「見方・考え方」の有効性を実感できる授業づくり～」『学校教育』No.1209、広島大学附属小学校
- ・鶴田清司（2019）「『見方・考え方』を働かせることによる『深い学び』～国語科特有の『見方・考え方』とは何か～」（『国語授業の改革19』学文社、近刊）